

～八雲立つ出雲から陽が昇る～ 人間自然科学研究所メールマガジン

vol.7

みなさま

前回のメルマガでご提案した「メカニカルアート・文ジニア会議」にたくさんの反応をいただきました。特に、文=文化・芸術（右脳）、ジニア=エンジニア（技術・システム・テクノロジー）（左脳）が融合するところに新時代の革新が生まれるという考え方には共感の意見をいただきました。

今回は、メカニカルアートということばを深く掘り下げてメルマガにご参加いただいているみなさまと認識を深めたいと思います。

メカニカルアートとは ——左脳の集約力と、右脳のダイナミズム——

人間は昔から、シャーマニズムと製鉄の技術の間にある、「スピリチュアル」の存在に気づき、宗教と技術の密接な関係をよく知っていたと考えます。彼らはたぶん技術ということの本質を、技術時代を生きている私たちには、もうわからなくなっているようなやり方で、正確に認識していたのだと思います。ここには、人間にとっての技術の本質にかかわる、とても重大なことが語られていると思います。古代ギリシア哲学の中で、その問題がどう理解され、どう表現されていたのかを探るとわかります。

古代ギリシャ人たちはシャーマニズムの宗教を日常的に生きていたわけですし、神話的思考がとらえていた真実もよく知り、金属の技術についてもよく知っていたのです。哲学者でないと技術者にはなれない。「技術」という言葉を今の私たちよりも広い意味でとらえていたと考えます。「精神に根ざした技術」とでもいえるのではないのでしょうか。つまり、技術を有用性、役に立つものと訳するのではなく、「真理」との関係性において語るべきことと認識していました。

製鉄技術、鍛冶師、音楽家、染色家の感性と技、メカニカルアートは、自然の奥底に隠れていて、表面にはあらわれてこないチカラを、人間がおもてに引っ張り出し、顕在化させ、あらわにする行為全体をさすのだと考えたいのです。それは人間の知性の本質と呼べるものではないのでしょうか。このチカラに気づき、意識し、活用することが今の時代に求められています。実は発明とはそのように生まれるものではないかと考えます。テクノロジーという行為を、人間の知性の全体性の中に取り戻すことが今、求められていると考えます。

小松昭夫が出版した「母なる中海」の副題には「汽水湖は21世紀文明の子宮」という小松昭夫が生み出した言葉がそえられています。どんなに世界へ飛び出す企業になろうと小松昭夫の精神的な原点は汽水湖・中海圏域にあります。

地域にこだわる気持ちは誰にも負けないものを感じます。地球生命の原理そのものである汽水湖・中海。ここに生まれたからこそ、八雲村から生まれたからこそ、今の小松昭夫があるという強い思いを、最近特にひしひしと感じてしまいます。

今、この時代こそ「天の時、地の利」、大きな挑戦の時、「メカニカルアート・文ジニア会議」に多くの市民、団体、志を同じくする世界の人々が縁結びのふるさと山陰で広く語り、議論し、構想を立て、実行する。そのネットワークがまもなく生まれようとしています。

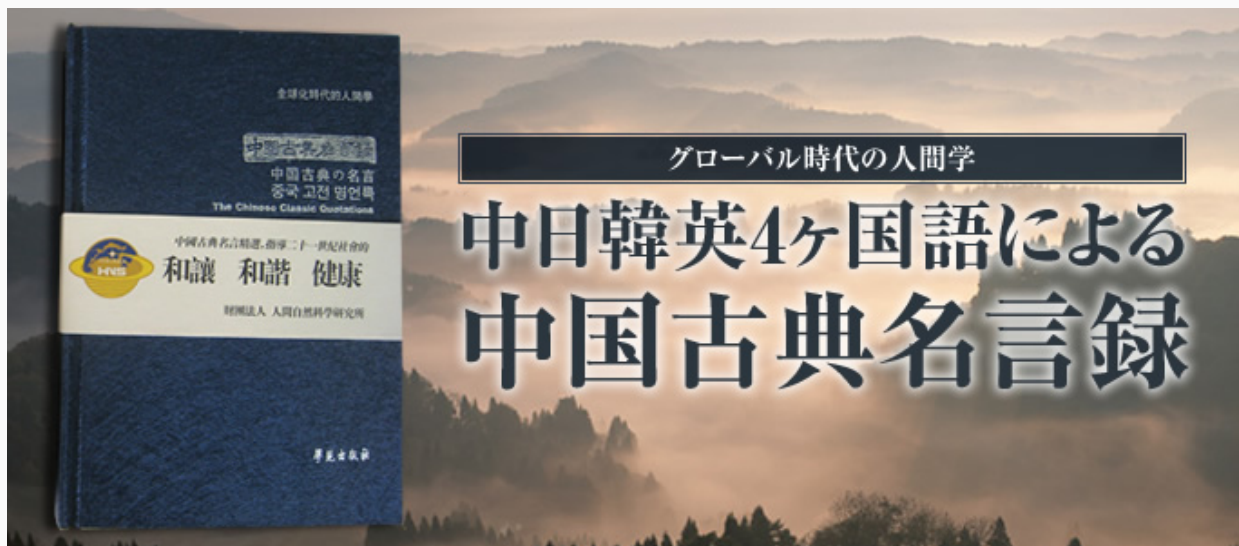


母なる中海 / 森清 著

関連動画(8分09秒)

朝日ニュースター よみがえれニッポン対談番組
ニッポン再生・逆転の発想「デモクラシーの源流」





グローバル時代の人間学

中日韓英4ヶ国語による 中国古典名言録

四力国語 巻頭言

巻頭言

人類は、終結期、高度化、金融商品、健康不安など地球規模の危機に直面し、「食生活変化」の分水嶺に立たされています。環境・健康という根源的問題に世界規模で取り組むためには、歴史の中で生まれた国家・民族間の懸念を昇華し、話し合いのできる普遍的平和の基盤を創る必要があります。

北東アジアには二十世紀の戦争の残滓が色濃く残っており、今も加害国と被害国の間では反感と不信が再生産されています。この地に暮らす人々の意識に、人類の未来が傾かっているといっても過言ではありません。

加害の歴史をもつ日本国と、国連常任理事国であり被害の歴史をもつ鉄大國の中華人民共和國から、被害の歴史をもつ大韓民國、朝鮮民主主義人民共和國と、国連常任理事国であり鉄大國の、アメリカ合衆國、ロシア連邦に呼びかけ、和

議、和議の平和事業を興し、朝鮮半島と日本列島を世界永久平和の骨幹地にするときです。この事業が動き出せば、対立にあえて紛争懸念の国に、美気と希望をもたらすでしょう。

この名言録は、数千年にわたって引き継がれた人類の智慧である中国古典から、今日の課題の「平和・環境・健康」に関する名言を抜粋し、中日韓英の四ヶ国語で編纂いたしました。本書の発刊を契機に、機微的に契機した科学技術と情報通信により、教養の生まれる議論の輪が世界に広がり、「対立の文化」から「共生の文化」への転換が始まることを願っています。

出版にあたり、学苑出版社と各出版関係者のご協力に對し、厚意なる感謝の意を表します。

財団法人 人間自然科学研究所

理事長 小松昭夫

(英語版 [P1](#)、[P2](#) / 中国語版 [P1](#)、[P2](#) / 韓国語版 [P1](#)、[P2](#))



中国や日本の研究者が集まり、儒教、道教など中国古典から、平和、環境、健康、に関わる624の厳選された名言が、中国、日本、韓国、英語の四ヶ国語の対訳で記載されています。

出版にあたり、出雲大社宮司 千家尊佑様から、神語「幸魂奇魂 さきみたま くしみたま」を揮毫いただき扉に掲載し、小松昭夫理事長は巻頭言を記しています。

北京で開かれた出版記念のフォーラムの様子を記したレポートと、島根日日新聞に掲載されたインタビュー「核大国の結節点にある朝鮮半島と日本列島」を掲載します。このレポートと新聞は、2009年2月22日「竹島の日」に開催された、名言録出版記念シンポジウム「混迷の時代 出雲から陽が昇る」で配布しました。



(左) 「朝鮮半島と日本列島の使命」島根日日新聞 2009年2月12日 (PDFファイル:約9.9MB)

(右) 出版記念フォーラム (PDFファイル:約9.1MB)

対立から共生の文化へ

長い歴史問題から生まれた国家間対立、近年では深刻な米中対立、核・スマートフォンの爆発的普及、世界を覆うコロナ禍、とめどもない通貨政策などが重なり、朝鮮半島と日本列島から究極の危機が始まりかねません。

朝鮮半島の対岸、中海・宍道湖圏域で活動が続けてきた人間自然科学研究所は、「天の時・地の利・人の和」を得て、「対立から共生の文化へ」転換する「平和・環境・健康」「宗教・政治・経済」「感激・感動・覚醒」を深く考察、議論、活動を通じて「天命」へと繋がりました。

朝鮮半島対岸に位置する中海・宍道湖圏域は、核大国の中国・ロシア・アメリカの対立と日本・韓国・北朝鮮の対立に国内の地域間・世代間・貧富の差の拡大・国家の統治不全も重なり、社会不安が急速に拡大しています。

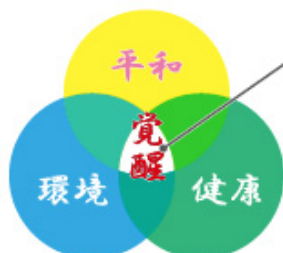
このような状況下に、島根原発三号炉の完成を控えています。
政略(原則)の上位概念の天略(原理)から、**真の地方創生**のストーリーを描くことにより、これに関わる方々の才能が次々と開花し、**真の健康寿命**を賜る流れが始まると信じています。

平和の定義＝戦争の無い状態は言うまでもなく、才能の開花を妨げる社会の文化的・構造的要因も無い状態

平和は創るものです。平和は、あたりまえのようにこの世に存在するものではありません。人間という生き物の特性を知り、その危うさを自覚するところから学ばなければなりません。

環境の定義＝社会環境（世界人的環境・国内人的環境）と、地球の歴史と、人類の長い営みから生まれる自然環境。

私達は地球をひとつの生命系として連鎖して存在しています。自然破壊、経済優先、効率主義の蔓延による危機が迫り、このままでは人類の悲劇は避けて通れないと思われれます。「豊かさの指標を変える」新しい哲学が必要です。そしてその哲学から生まれる新しい事業こそ私達が担うべき事業です。



「永遠の命を賜る」

健康の定義＝肉体及び精神（心と脳）が時間（神）の経過と共に、次々と才能が開花する状態。人類は自然界で関係性が無いと生きていけない生命体。価値観が同じで得意領域が違う3人が語り合う状況が必要とする。三人寄れば文殊の知恵。

人は何のために生きるのか。私は「楽しく愉快に天寿を全うしたい」と考えています。そのためには自分の才能が開花して光り輝く状態であり続ける生き方を実践し続けるチカラが大切だと考えます。健康寿命を長くする秘訣はまさに自分の中に眠っている才能を呼び起こし鮮やかに開花させることにあると考えています。



1987年8月 修道塾開所式

修道塾を作り翌年1988年に若手経営者20名で「知革塾」を開塾。

[研究所の歴史より](#)

編集後記

「母なる中海」という小松社長の「21世紀新産業興し」をテーマに1996年に出版された本にはふるさとにこだわり、中海・穴道湖、特に中海・本庄工区を活かす大胆なプロジェクトが提案されています。作者の森清さんは、この時が企業家から事業家になると決意された時ではないかと想像されています。森清さんはこの本を通して一人のベンチャー企業の経営者が企業を経営しながら思想を高め、事業家へと昇華していく過程に注目して欲しいと書いておられます。そして戦後の経済発展を支えてきた地方の中小企業の存在の大きさにも触れています。人間自然科学研究所の原点にもなった「知革塾」と名づけられた異業種交流会の勉強会は1988年に始まっています。

今から32年前のことです。ここが小松社長の活動のスタートだといえるのではないのでしょうか。地域に生きる多くの経営者、地域づくりに取り組む人々などに語り続けながら躍動的な活動がおこなわれてきました。そして平成6年に「神在月縁結び大会」へと昇華され、本格的な事業家としての活動が実を結び始めたのです。編集人をさせていただいている私はこのころから本格的な指導をいただくようになり現在に至ります。このメルマガ発行の目的である、「小松昭夫社長の思想・哲学」をわかりやすくお伝えするためには、メルマガ読者の皆様方には是非「母なる中海」をもういちど読んでいただきたと強くオススメさせていただきます。その入り口として次回からは少しこの「母なる中海」をひも解きながら小松昭夫社長の哲学をご紹介させていただきたいと思います。

編集人 長谷川泰二



小松電機産業株式会社



人間自然科学研究所